

生活世界のつきつめ方

——建築家 増田友也の場合——

小野 育雄

(2010年10月12日 受理)

Study on methodology in realization of life-world

——in an architect MASUDA, Tomoya——

Ikuo ONO

Abstract

The intention of this paper is to make a thematic explication of architect Tomoya MASUDA's methodology in realization (insight, investigation) of life-world by means of comparative analyzing between his thesis for a doctorate and his book out of its improved thesis after twenty two years.

Keywords: Tomoya MASUDA, phenomenology, life-world (Lebenswelt), Arunta, ritual place, myth, pure experience, phenomenon, architectural space

序

増田友也(1914-1981年)は、「鳴門市文化会館(遺作)・鳴門市老人福祉センター・鳴門市勤労青少年ホーム」(この3作は統合的に構成され、3作ともその担当者筆頭;前田忠直/設計開始-竣工;文化会館=1971-1982・老人福祉センター=-1977・勤労青少年ホーム=-1975年)と、「東山会館」(担当者;玉腰芳夫/竣工;1963年,とり壊し;1988年)という,とりわけ見事なふたつを含む数多くの建築することを残したものの,建築家としては短命ともいえる66歳もしくは67歳の年,これから,その言葉による思索と重なり合う建築作品をさらに生成しはじめる可能性をもったまま,生を終えている。増田は1957-81年までの24年間に84作品,そのうち実施案61作品,計画案23作品を制作している¹⁾。そしてそれら作品化とともに思索された増田の言葉の多くは,1999年に『増田友也著作集』全5巻にまとめられている²⁾。

増田は或る時期以後,建築とは何か,という問いを,「現象論的」³⁾態度に於いて解こうとし



左：鳴門市文化会館（遺作）・中央：広場・右：鳴門市勤労青少年ホーム・その奥：鳴門市老人福祉センター・
手前の水面：撫養川

2009年5月筆者撮影

ていた。本稿は、増田がその態度に接近しようとするもののそこに身をすえることのできないままにいた地点、と、その態度へ身をすえそこに於いて解こうとする地点、との差異に注目し、増田の行なった生活世界のつきつめ方を論じはじめるものである。

I

つぎの箇所⁴⁾には「現象論的」態度の意味を語りはじめる増田の言葉がある。

この〔Hildebrand, Langer, さらに Sartre の〕ような所謂現象論的立場に立つならば、建築なり空間なりもしくは上記のような〔「すべての造型芸術のうちで、建築が特に空間的であると言われ……（Cohen, Worringer, Scott, Langer, Pevsner）」, 「これを通説とする傾向が見られる」ものの, 「これらの場合の空間観念そのものが頗る多様であって必ずしも一定せず, ゆえに, これを「一般的な公理であると認めること」はできないのであるが, しかしこれを一般的な公理と仮に呼ぶとして, このような

⁵⁾ 一般的な公理が少なくとも *a priori* として提出されることはなくなるのである。

ここには明瞭に＜現象学的還元＞の意味が記されている。そこにはつづけてつぎのようにある⁶⁾。

しかしそこにはまた別な *a priori* がこれに代って提起される……にしてもこの場合の *a priori* 的自我は、個別的な全体的空間的現象において実存するのみであって、外部からそれに参加する異質なものではなくなるであろう。そうして建築もまた現象であるならば上の問題〔「建築的空間とは建築における空間である。しかし建築における空間とは何であろうか」、この問題〕はただ一つ、建築的空間とはどのような現象であり得るかと言うことに帰着するであろう。

a priori 的自我が実存するのは現象に於いてである、とは、増田は、〈生〉を〈現象〉（現象すること）と等しい、と謂っているのである。当時のことを増田は、25年以上後の1978年4月、新入生歓迎講演でつぎのように話している⁷⁾。

森田慶一先生の『建築論』という本……は、あるひとつの立場からいえば完璧な建築論の書物です。……森田先生はあの書物の中で「西洋建築思潮史」というのを書いておられます。それは先生の学位論文である『ウィトルーウィウス Vitruvius の建築論的研究』というそれが基本になって……おられます。……私は建築というものがその当時わからなかった……。森田先生の Vitruvius の研究を読んでみても私にはよくわからないところがあった。森田先生がおっしゃられているかぎりではわかるのですが、それでも。それでは建築とは一体何事かというふうに考えてみるとよくわからない。／そこで私自身は、……非常に変わったやり方をやった。……建築というものを括弧に入れて、いまはそれを問わない。それを問わずにただ漠然と建築というものというぐらいのことを頭において、未開民族の建築的な形成というものを調べてみたわけです。そうしてそこでもし建築というものを括弧に入れて考えれば、そこに空間的形成というものがある。それもなおかつ建築的とは言えない。建築的とは言えないけれども、空間構成という意味でならば、あるわけです。……未開民族の儀式的場所というふうなものは、ただ一時的に、野っ原なりあるいはブッシュの中につくられるような場所、そういうふうな空間的形成の中に、明らかに構成的なひとつの意図があるのではないかと。……ちょうどそのころ、……ギーディオン Giedion が“The Eternal Present”というふうな本を書いて未開民族の建築をいろいろとやっておられたわけですが、それは着想が私とほとんどまったく違っていた……

当時の増田にとって建築が「よくわからない」、建築的空間が「よくわからない」とは、Worringer や Langer ら、さらに Giedion ほかの建築なり空間なりの論も、『Vitruvius の建築論的研究』を含む師森田慶一の建築なり空間なりの論も、つまるところ、〈現象〉を論じていない、ゆえに、このままでは「よくわからない」、と考えていたのである⁸⁾。そうしたなか当時1950年代前半に増田はいわゆる「未開民族の」建築的事象研究をはじめた。

まずは（建築的）空間について、増田自身のもつ信憑を検証するためと、共通理解に至りうる可能性をもつ部分（増田により究明されていく「隔離」のあり方ほか）を確認していくために、いろいろとさがして出会ったのが、「未開民族の」事象であった。「未開民族の建築的な形成」を調べると、そこに浮かび上がりみえてきたのが「空間構成」（「空間的形成」）と言

えるようなことであって、その「意図」であった、というのである。

研究は1955年10月に学位請求論文としてまとめられる⁹⁾。

II

1950年代後半に増田はつぎのように記している¹⁰⁾。

私は思う。現実の空間、或は、現実に在るもの、そう言うものは、いまこの時の私とは、何の関りもない、したがってまた、そこに象徴的意味が充たされたりすることもないものであり、それ故にこそ、客観的に、現実と呼ばれているものであろう。それを、私は、見ることができぬ。見ようとすれば、それは忽ち私に働きかけ、或は現象的空間に化してしまうからである。ところでここでは、私はもっぱら、私自身に、直接に、つながりのある現象の事がらに関心しているのである。

この記述を含む全体「壁と私と空間と」と学位請求論文「建築的空間の原始的構造」には共通して、＜現象＞としての＜空間＞へ向かおうとするときに増田に現われる、＜記号的＞と＜象徴的＞という対化がみられる。

一般的に思考や情緒を伴はぬ機械的行動が有り得るものとすれば、そのような行動の場所もまた記号的であると言ひ得るであろう。したがつてはなほ動物的である Arunta の生活空間や、Todas の全く公式化された生産的行為の場所であるところの dairy の建築的空間なども、そのかぎりではやはり記号的であろうと思われる。

しかしなおそれらは象徴的な神話的空間でもあるのである。

というようなかたちでその対が現われ、

未開人は、記号的な活動の空間に住み、象徴的な神話的空間を表出すると見るならばそれは誤解を免れないであろう。未開人はこのような分化し得る二つの観点をもつところのただ一つの現象的空間に住んでいるのみである。

……これら未開人に在つては純粹な知覚的空間としてそれ〔Arunta と Todas とにおけるこのような建築学的研究によつて明らかにされたそれぞれの儀場や建築などの空間的構造〕が表象されるよりも、行動的な現象的空間として観念されているものと見られるのであるから、その志向は当然そこにおかざるを得ない。

そうしてそのような現象的空間……が topography の記号的機能と象徴的機能とに依存するものであると見ることができる……。この記号的機能には、空間形成的な deictic function と空間分割機能とがあるものと考えられる。

……このような象徴的空間の表出とは神話的空間の措定にほかならず、神話的空間とは動物的な活

動の空間〔記号的空間〕に依存する……。

……原始的な段階……においては、建築的空間とは空間性の具体的な情緒的表出であるところの象徴的空間の構造的措定もしくは設定であると言っていることができるのであろう。それはまさに象徴的空間の創造にほかならぬのである。

と記される¹¹⁾。

当時の増田の態度に於ける、記号的空間と象徴的空間という二つの空間への現象的空間の裂開、この対は、日常的世界と非日常への現象の裂開という対化同様、晩年までずっと変化しつづける増田をみるときの鍵語となる対となるかもしれない。

III

増田友也41歳の年、1955年に提出された学位請求論文、これには、それから、22年後の63歳になる年、1977年までに、自身により大幅な増補の手が加えられ（増田の言葉では「再治」を経て）、それが翌1978年に単行本として公刊される¹²⁾。

学位請求論文、同論文「再治」公刊本とも、論文名、書名は同じ、

建築的空間の原始的構造 Arunta の儀場と Todas の建築との建築学的研究

である。

ふたつの第1章までは目次で比較するとつぎようになる。左方が学位請求論文であり、右方が同論文「再治」公刊本である。（節の名称が変化しているところにアンダーラインを引いた。）

序

第1章 Arunta の儀場

- 1 生活空間
- 2 宿营地
- 3 Ratappa 石〔本文の節名では *Perta ratapp*〕
- 4 Quabara
- 5 *Mbanbiuma*
- 6 Initiation
- 7 *Arilta*
- 8 *Lartna*
- 9 *Engwura*

序

第1章 Arunta の儀場

1. 生活空間
2. 宿营地
3. *Perta ratapp*
4. *Quabara*, または *mimesis*
5. *Mbanbiuma*
6. Initiation
7. *Arilta*
8. *Lartna*
9. *Engwura*

10 Summary

10. *Churinga knanja*

内容としては、まず、「序」が大幅に書き換えられている。

学位請求論文でもすでに、「建築的空間とはどのような現象」¹³⁾ か、と問い、〈現象〉としての（建築的）空間を問いつめることが、肝要なことであると自覚されており、「ここではそのような建築的空間の現象的形式を研究しようとするものである」と述べる¹⁴⁾。しかしその直後に、「それは現象論的建築論としてではなく」と述べる。そして続けて、「建築的空間の原始的様相を明らかにするにとどまるもの」であり、「それはそこに見出される発生的様相のうちにこそ本質的問題の核心が秘められているであろうとする予想をもつからである」と抑制的に仮説する¹⁵⁾。同様に、「すべての存在的研究とともにこのような空間的な現象的研究が行われなければならない、建築の起源の問題はもちろんのこと、その一般的な本質的問題もまたその解決を危惧せざるを得ないのではないかと思われる」と記す¹⁶⁾。すなわち、この時点では、増田は「考察の或る場合には厳格な現象論的態度を堅持」¹⁷⁾ したいものの、〈現象論的〉に本格的な（存在論的）研究に踏み出すのではなく、存在的研究とともに〈現象的〉空間研究に着手する、というのである。（以上のような内容の学位請求論文の「序」には「象徴」という語がいちども用いられない。「象徴」の哲学者として知られる Langer が出てくる場合も、「象徴論的立場」とは記さず、慎重に、「現象論的立場」の Langer、「建築のみならず一般に造形芸術とは、すべて空間的現象にはかならずぬする」Langer と記す¹⁸⁾。「象徴」的空間ではなく、「現象」的空間なのだ、ここで主題化しているのは、ここでみつめているのは、と増田はあえて強調しているのである。「序」の後の本文ではもちろん「象徴」という語は頻出する。すこしだけあえて示しておきたかったのは現象と象徴とではズレをもつということであつたろうし、そのことが増田にとっては重要なことであつたということであろう。）

同論文「再治」公刊本において、「序」はまったく別ものと言えるほどに書き直されており、Heidegger による〈現象〉の定義を採り上げつつ、また image についての現象論を試みる Sartre による記述の引用や参照をくり返し終始行ない、主に「image」-「図式」-「記号」、「図形」、「図面」について言及しながら、学位請求論文に含まれてはいなかった、〈現象〉概念の精緻化や研究の方法論を明晰化しようとしている¹⁹⁾。

「第1章」には、学位請求論文と同論文「再治」公刊本との間に、「4 *Quabara*」が「4. *Quabara*, または *mimesis*」へ、「10 Summary」が「10. *Churinga knanja*」へという節の名的変化だけでなく、節名に変化のない他の節を含む、諸節内部の改善や大幅な増補に類する変化がみられる。

以下、本稿では、学位請求論文と同論文「再治」公刊本の、比較分析すべき箇所としてはもっ

とも重要な節のひとつとかがえられる各「第1章」の「10 Summary」の節と「10. *Churinga knanja*」の節の照応する部分を抜き出し、比較しながら、増田の思索の成熟についての分析の端緒を探るとともに、分析を拓いていきたい。

IV

まず、つぎの照応部分から始めたい。(おおきく変化・増補されているところにアンダーラインを引いた。以下同様。)

発生的な *Knanikilla* | : totem 集団の聖所²⁰⁾ と、もっとも構成的な *Lartna* | 69頁 : circumcision| の儀場 (*Apulla*) との間には、本質的な差異があるように見うけられる。

[学位請求論文, 110頁]

神話以前の純粹経験が、神話として定着されている *churinga knanja* | : 神聖な totemic topography, 各個人の神話時代の totemic ancestor の所持していた *churinga* | : (1) sacred totemic ceremony のこと, (2) 威力 *kuruna* をもつ石片又は木片, 集団もしくは個人に属する, (3) 聖物の総名²¹⁾, とりわけ発生的な *knantikilla* | : totem 集団に所属する totem centre, ancestors の精霊が住んでいるところ| と、もっとも構成的な *lartna* | : circumcision の儀式| の儀場 *apulla* | : initiation 儀式で circum-cision の行われる儀場に造られる mound : 父の母または父の母の姉妹の呼び名| ground との間には、それらの意味や方向の定着という仕方に差異があるように見うけられる。言わばそれは, Arunta の常に既にして投げこまれている世界と, 既に神話それ自身がそうであるような, 投げかえしとしての世界創造との, 両義的な差異であろう。

[学位請求論文「再治」公刊本, 95頁]

学位請求論文, 同論文「再治」公刊本, 両方とも、自然のままの場所に見い出している聖所「*knantikilla*」と人工的に生成される儀場(やはり聖なる場所であるが人工によりつくられる場所)のうち「もっとも構成的な *lartna* の儀場 *apulla*」との差異一つづく部分で、論文も公刊本も、「一方が自然の topography において成立しているのに対して、他方が人工的 topography によって構造／構成されている」と述べられる差異一に注目しており、学位請求論文では、その差異を「本質的な差異」とだけ記されるが、同論文「再治」公刊本では、いかなる本質的差異なのか、その内実を記し直すかたちで、「常に既にして投げこまれている世界」と「既に神話それ自身がそうであるような、投げかえしとしての世界創造」との「両義的な差異」と語り直されている。この部分を含め、学位請求論文, 同論文「再治」公刊本ともつぎのようにつくるのであるが、目次のときと同様に、左方に学位請求論文を、右方に同論文「再治」公刊本を

照応するように配置・引用し、その後にそれらの比較をさらに分析するとともに図式化してみたい。

発

生的な *Knanikilla* | : totem 集団の聖所|

と、もっとも構成的な *Lartna* |p. 69 :
circumcision| の儀場 (*Apulla*)

との間には、

本質的な差異があるように見うけられる。

それは一方が自然の topography [地勢、というに留まらず、そこに於いて図となって世界がそのつど現われてくる地平としての場所] において成立しているのに対して、他方が人工的 topography によって構造されているからである。そうしてそれが自然であることと人工であることとの間には、わたることのできない溝があると考え、これらの間の差異は本質的であると見なさなければならぬのである。

神話以前の純粹経験が、神話として定着されている *churinga knanja* | : 神聖な totemic topography, 各個人の神話時代の totemic ancestor の所持していた *churinga* | : (1) sacred totemic ceremony のこと, (2) 威力 *kuruna* をもつ石片又は木片, 集団もしくは個人に属する, (3) 聖物の総名||, とりわけ発生的な *knantikilla* | : totem 集団に所属する totem centre, ancestors の精霊が住んでいるところ| と、もっとも構成的な *lartna* | : circum-cision の儀式| の儀場 *apulla* | : initiation 儀式で circum-cision の行われる儀場に造られる mound : 父の母または父の母の姉妹の呼び名| ground との間には、それらの意味や方向の定着という仕方に差異があるように見うけられる。言わばそれは、*Arunta* の常に既にして投げこまれている世界と、既に神話それ自身がそうであるような、投げかえしとしての世界創造との、両義的な差異であろう。それはまた、一方が自然の topography [地勢、というに留まらず、そこに於いて図となって世界がそのつど現われてくる地平としての場所] において成立しているのに対して、他方が人工的 topography によって構成されているということでもあろう。そうしてそれは、*Lévi-Strauss* が、taboo の現象に見出したような、自然 *physis* から制作 *poiesis* への移行を、*alchera* | : totem 集団の先祖たちの生きていた創世神話の時代| 始源神話にもこれらの儀式にも、さらには儀場の造成にも認めなければならぬであろう。またそれは *Arunta* にとっての、いわゆる自然のままの自然らしさから、それとは別な人工という自然らしさへの、自己同一的な移行であって、そのような移行が、totem として、その totem の mime-

そうしてそれは、すでにしばしば触れて来たように、*Knantikilla* の成立契機に生物学的側面があり、それに対して人工的儀場が純粹に人間的であるということから、この溝に動物と人間との境界線を設定することになるかのようなのである。

しかしながら *Knantikilla* にあっても、その生物学的契機が例えばそこが食用動植物が豊富であると言うようなものであっても、それが単に生物学的に終始するものではなく、ただちに神話を形成するのである。

人工的空間における 視覚的象徴操作に先立って、自然の topography においてまた概念的にそれが操作されているのである。

Cassirer にしたがって、象徴の操作を本質的に人間的であるとするならば、この溝に境界線をおくことは誤りであると言うほかはないであろう (E. Cassirer, *An Essay on Man*, New Haven, 1944, pp. 23f. (33f.)). 況〔ま〕してこれらの儀場は、儀場そのものとして存在するよりも、むしろ全体的儀式的脈絡的要素であるにすぎず、さらにその全体的儀式的脈絡とはすなわち

sis の *quabara* } : 諸儀式で行われる仕草、主として totemic ancestor のもの真似 として、或いは *churinga* の replica としての実践 praxis を促すものであることを認めなければならぬであろう。実践的なその構成は、一方では分節的な記号体系としての親族体系であり、他方では全体的な象徴としての totemism 体系であって、相互に heterogeneous でありつつも、なお homologous な、これらの両体系の成立に、Arunta の匿名の身体として化身する前意識の、可能的な領域 hodos の、記号的な方向づけと象徴的な意味づけとの間の戦ぎ〔そよぎ〕を見ることになるであろう。

しかしながら *knantikilla* の成立において、たとえその下に生物学的契機が透けて見えるにせよ、例えば、そこが食用動植物が豊富に出没する場所であるというような、単に生物学的な説明は、それをかえって神話的存在として片づけてしまうことと同じように、これらの移行の真実を隠してしまうことになろう。既にして移行の現象であるからには、これらの人工的空間における、いわゆる視覚的な象徴的操作に先立って、自然の topography において、Arunta 自身が前意識的に既に操作されているのである。しかも Cassirer にしたがって、象徴的操作を本来的に人間的であるとするならば (E. Cassirer, *An Essay on Man*, New Haven, 1944, pp. 23ff. (33ff.)),

これらの儀場は、儀場そのものとして孤立するよりも、むしろ全体的儀式的の言わば脈絡的要素にすぎず、その全体的な儀式的脈絡とは、すなわち言葉と行為とにおいて伝誦され、その

神話にほかならぬのであるから、人間的領域とは神話的領域にその起源をもつとも言い得るのである。そうすると *Knantikilla* と人工的儀場との間の溝は消え、*Knantikilla* もまた人間的形成であり、それがその意味で生物学的領域に重複しているものと言えるのである。そうしてそこに

象徴的空間の一つのもっとも原初的な発生形態を認めることになるのである。(後に Todas の象徴的空間のもう一つの原初的な発生を実用的な隔離に見出すことになるであろう。しかしそれもまた、単にその動機において実用的であるにすぎず、ただちに象徴的意味を担うものであることも明らかにされるであろう。)

しかしまた、それにも拘らず人工的空間にはやはり本質的に発生的な意義が認められるのである。それは儀場の建設が、そのような儀式的脈絡から一応離れて行われるものである以上、*Knantikilla* には見られないような、唯物的、技術的抽象の行われている期間が存在すると言うことである。言うまでもなくこのような技術的伝統も、それが伝統であるかぎり、それぞれの神話をもつものではあるが、しかしそのような神話の本質について見るならば、それは言わば人工的 *topography* の抽象的操作についての作法であると言うことができる。それは神話的に説明せられた技術的原理にほかならぬのである。すなわち人工的空間の成立とは、人工的 *topography* の象徴的操作による神話的世界の視覚的表現の発生であると言えるのである。

そうして、このような理解に立って、はじめて儀場を儀場のものとして見るのがゆるされるのであるが、しかしそれにしてもなお儀場の空間的構造の研究は、すでに試みってきたように、その儀式的脈絡においてのみ可

mimesis として儀式化されている *alchera* 神話にほかならぬのであるから、*Arunta* の人間的な存在領域とは、原初的な神話的領域にほかならぬのである。それが儀場として実在化するのには、神話の儀式化としての *quabara* の須臾性が、それ自身に欠落している実在性を、常に既に実在への傾向をもつ *topography* に見い出すからであって、*Arunta* の儀場において、このような仕方での象徴的空間の一つの原初的な発生様態を認めることになるのである。

言うまでもなくこれは *Arunta* にとって、象徴でも、空間でもないであろう。しかしそれは、*alchera* 世界を身体的に生きる *Arunta* の、その地の上に浮かびあがる、それではないものとしての図を、*quabara* として描きあげるものであり、*quabara* 的な replica の人工的 *topography* として、その儀場を造成するのではある。そういうそれではないという仕方は、*Arunta* にもあって、*Arunta* はその固有の非化の仕方、言葉以前の須臾的な純粹経験を、その replica としての、もしくは *mimesis* としての、言葉と行為の *alchera* 神話に移し入れるのである。つまり実在化するのであるが、しかしそれはなお反省以前の、非反省的な非化においての実在である。このようにして *Arunta* の、見えぬものから見えるものへの移行とは、見わけることとしての見ることのうちに浸透している非化にその根拠をもつことになるのである。しかしまたそのような純粹経験とは、この *Arunta* に見られるように、その非化としての *mimesis* においてしか、実在的に経験することの出来ぬ、言わばそれは非-経験にほかならぬのである。それ故に *totem* とは受肉であり、その化身があらゆる儀式 *quabara* になるのであって、この *alchera* 始源神話の原体験がすなわち血

能であることは言うまでもない。

[学位請求論文, 110-113頁]

の initiation 儀式になるのであろう。

既にして *churinga knanja* は, *alchera* 始源神話とともに, *replica* にほかならぬとすれば, そのようなものとして造成される *Arunta* の儀場とは, どのような構造をもち, それがどのような仕方で *visible* になるのであろうか。

[学位請求論文「再治」公刊本, 95-97頁]

冒頭のあたりでは, 学位請求論文と同論文「再治」公刊本とには, 前記したような, 語り直しとしてのおおきな変化がある。「自然の *topography* において成立している」(つまり, 自然のままの場所に見い出している) 聖所「*knanikilla*」と「人工的 *topography* によって構造／構成されている」(つまり, 人工的に生成される) 儀場という聖なる場所のうち「もっとも構成的な *lartna* の儀場 *apulla*」との差異について, 見解におおきな変化がある。学位請求論文では, この両者には「わたることのできない溝」・「本質的差異」がある, と述べられる。これに対して, 同論文「再治」公刊本では, この両者の差異とは「両義的差異」であり, 「常に既にして投げこまれている世界」と「既に神話それ自身がそうであるような, 投げかえしとしての世界創造」との「両義的な差異」であり, この両者とは自己同一的に移行する二者であり, 「相互に *heterogeneous*」であり(異なり)つつも, 「なお *homologous*」である(一である), と述べられ, そのようなありかたを「移行の現象」と述べる。学位請求論文では, わたることのできない溝をもつ本質的な差異があるとされる二者を, 同論文「再治」公刊本では, その差異をもつ二者とは, 同一のものの裂開する二者であり, 一方から他方へと移行する, その二方のそれぞれであり, 二様のそれぞれ裂開したものと謂っているのである。

しかし, 学位請求論文と同論文「再治」公刊本ともその後, Cassirer²²⁾ に言及することで, 共通のことを述べはじめる。つまり学位請求論文の方では, 「象徴の操作を本質的に人間的であるとするならば」, 自然の *topography* において成立している自然のままの場所に見い出している聖所と人工的 *topography* によって構造されている人工的に生成される儀場という聖所との間の「この溝に境界線をおくことは誤りであると言うほかはない」・「溝は消え」と述べ, 冒頭の「わたることのできない溝」というみずからの言へみずから否定的に補完しており, 後の同論文「再治」公刊本とのその点での相違は無くなる。

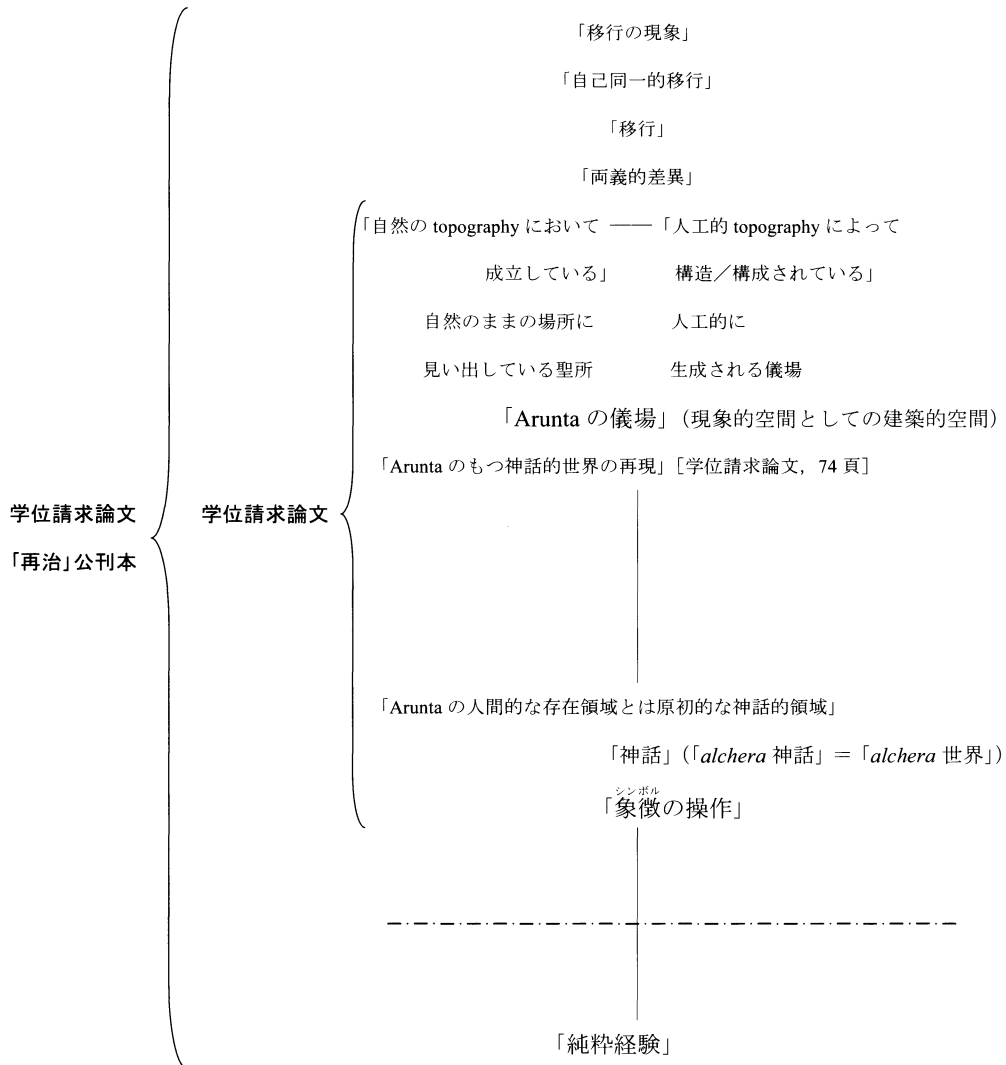
以降いつとき, 論文と公刊本との間には変化は無く, *churinga knanja* とりわけ発生的な *knanikilla* という自然の *topography* において成立している聖所(=儀場)も, 人工的 *topogra-*

phyによって構造されている儀場（＝聖所）も、全体的儀式的脈絡的要素であるにすぎず、その全体的な儀式的脈絡とは *alchera* 神話にほかならない。ゆえに、Arunta の人間的な存在領域とは、原初的な神話的領域にほかならない、と共に述べる。しかしこのあたり以後から、見解に或る程度まで一定の共通性を保持したままに、学位請求論文には無い指摘が同論文「再治」公刊本にはふたたび現われてくる。公刊本には本節冒頭劈頭に「神話以前の純粹経験が、神話として定着されている」という指摘がすでに現われていたが、このあたり以後から、「再治」公刊本においてのみそのことが詳しく記述されはじめる。（綿密な分析を含む増田の変化についてのさらなる解明は後日の稿としたい。）

さて、学位請求論文「再治」公刊本ではこのように「純粹経験」が、「神話」（神話的思惟、神話的態度、神話的空間）と結ばれる形で、神話をそこから生成する相として、神話前に布置されている。だが、学位請求論文では神話前についての言及はない。「再治」公刊本では、象徴的操作という神話という知の発生・根柢を、純粹経験にこそあると謂っている。建築的空間の生成ほか、学位請求論文では象徴的操作としての神話的世界という相から出立しているのに対して、同論文「再治」公刊本では経験の純粹相というもののから、与えられた経験という根柢の知から（知識自身の自己形成がそこに始まっている根柢的な経験から）出立しようとしている。

ここまでに見えてきた、Arunta の儀場にかかわる論における、学位請求論文と同論文「再治」公刊本との間の変化を、下に図式化しておきたい— Arunta の儀場とは、増田にとっては、自然のなかに Arunta のひとびとが見い出している聖所（を中心とする儀場）と人工的に Arunta のひとびとに生成される儀場のことであり、学位請求論文においてはこれらの関係へ主要な論述が注ぎ込まれており、同論文「再治」公刊本においてもそのことは変わらないことである—。

一点鎖線とその下方をもち、「両義的差異」以上をもつ、この図式の構造（生活世界のつきつめ方の構図）に、＜現象＞としての＜空間＞へ向かいつつ生涯にわたって継続的に変化する増田の＜建築についての思索の成熟＞の一節（ひとふし）をみることができる。



注

- 1) 前田忠直, 「増田友也の建築的思惟」(『建築と社会』, vol. 81, 2000年9月所収) による。
- 2) 増田友也, 『増田友也著作集 I, II, III, IV, V』(全5巻), ナカニシヤ出版, 1999年。本著作集全巻の装幀は前田忠直による。
- 3) 注4) に明記する学位請求論文において増田自身が用いるもの。「現象学」とせず「現象論」となっているが, 大橋良介の

「現象学」の代わりに「現象論」という語を用いた。これは「フェノメノロジー」というものの根本性格を少し考えた結果でもある。フェノメノロジーはフッサールが主張するように、どこまでも「厳密な学」でなければならない。しかし他方でそれは、「学」をその根源である生と世界へ問い返し、その限りで「学」を内在的に越える根源直観を初めから蔵していなければならない。そのような根源直観の「観」（ノエシス）は、「理」（ロゴス）の根底にあってロゴス以前の作用である。フェノメノロジーの内奥部には「フェノメノエーティク」がある。「現象論」はこのフェノメノエーティクを理念とする。田辺元の「メタノエーティク」が想起されるであろうが、これはノエーティクを「越える」（メタ）という意味をもつものであった。それに対して本書では、「観」（ノエシス）を深い意味での「直観」（アイステーシス）の名とし、フェノメノン（現象）の根源直観と解するものである。

このような「観」（ノエシス）を「理」（ロゴス）に即して展開するものとして、本書が「現象学」でなく「現象論」の語を用いるもうひとつの理由は、仏教の「論」を念頭に入れるからである。「論」はもちろん「ロゴス」であるが、大乘仏教の「論」は釈尊の説法である「経」を展開したものであった。それは客観的な「学」として展開されたわけではなくて、「教」として伝承され、教義ないし教学となっていた。そこに「哲学」の立場からする大乘仏教の「論」の問題点があるのであるが、しかし逆にこの「論」は、事柄を客観化する「学」よりも根源的なところを見る「観」を蔵していた。現象すなわち「色」がそのまま「空」であることを「照見」する直観である。このような直観を論として展開するのが大乘仏教の「論」であるから、それはフェノメノロジーの以前にして根底すなわち「フェノメノエーティク」の性格をもつと考えられる。

（大橋良介、『悲の現象論 序説』，創文社，1998年，10-11頁）

と述べる意味での増田の選択もしくは当時そのような意味で「現象論」とされるのが一般的であったのか（いや、当時の哲学界の論文等ですでに「現象学」が一般的であったようであるが）、増田の真意は不明である。しかし増田のし方と大橋のし方が響きあっているようにもとらえられるゆえ、前者に当たる増田の積極的な選択ともかんがえられ、本稿では増田の用語のままとしておく。増田にいかんする力は、この意味においてのような「学」を用いず「論」を選択していることに通じているとおもわれる。

- 4) 増田友也、『建築的空間の原始的構造 Arunta の儀場と Todas の建築との建築学的研究』，学位請求論文（京都大学），1955年，「序」，IV頁。アンダーラインは筆者による。以下同様。
この学位請求論文そのものは、注2) に明記した著作集全5巻内に含まれていない。著作集内に収められている同名のものは、この論文執筆から20年以上経て同論文を大幅に増補変化され出版されたものである。
- 5) [] 内は筆者小野による補記。以下同様。
- 6) 同上，「序」のIV頁。
- 7) 増田友也，「建築について」と題する新入生歓迎講演，1978年4月，より（増田友也，『増田友也著作集 V』，ナカニシヤ出版，1999年，308-309頁）。
- 8) このとき建築をわかろうとするために増田のとうろうとしていた方法は、現象論的アプローチであったし、＜現象＞としての建築的＜空間＞を記述するために、解釈学的循環をこころざしていたといえる。解釈学的循環とは、先行理解と解釈との循環のこと、すなわち、「これから理解を持ち来たらそうするいかなる解釈も、解釈されるべきものをあらかじめすでに理解（先行理解）していなければならない」（Heidegger, Martin, *Sein und Zeit*, 1927, s. 202 (s. 152)（マルティン・ハイデガー，『存在と時間』，参照邦訳数種））という循環のことである。
- 9) その翌年1956年9月に出されている『抄』と付記された学位請求論文要約冊子の「序」に，「括弧の中に入れ」というフッサール由来の用語が，残されている増田の言葉内では初めて見られる（増田友也，学位請求論文名に『抄』と付記された学位請求論文要約冊子，『建築的空間の原始的構造 Arunta

の儀場と Todas の建築との建築学的研究 抄』, 1956年, 1 頁)。

- 10) 増田友也, 「壁と私と空間と —— 建築家にとって, 空間, とは何か——」 (『大阪建設業協会会報』, 1958年1月所収) より。
- 11) 増田, 上掲の学位請求論文, 順に, 295, 338-339, 343-344, 345, 348頁。
- 12) 増田友也, 上掲の学位請求論文「再治」公刊本, 『建築的空間の原始的構造 Arunta の儀場と Todas の建築との建築学的研究』, ナカニシヤ出版, 1978年。
- 13) 増田, 上掲の学位請求論文, 「序」のⅣ頁。
- 14) 同上。
- 15) 増田, 上掲の学位請求論文, 「序」のⅣ-V 頁。
- 16) 増田, 上掲の学位請求論文, 「序」のⅥ頁。
- 17) 増田, 上掲の学位請求論文, 「序」のⅨ頁。
- 18) 増田, 上掲の学位請求論文, 「序」のⅢ-Ⅳ頁。Langer, Susanne Katherina Knauth について増田の用いたものは, *Philosophy in a New Key: A Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, (1942) 1954 と *Feeling and Form: A Theory of Art*, 1953 であった。
- 19) 増田, 上掲の学位請求論文「再治」公刊本, 「序」(i-vii頁) / 上掲の『増田友也著作集 Ⅱ』, 「序」(v-xi 頁)。そのなかで増田の用いる Heidegger による定義は, *Sein und Zeit* にあり, 引用及び参照する Sartre, Jean-Paul の記述を含む書は, *L'Imaginaire*, 1940 (ジャン・ポール・サルトル, 『想像力の問題 — 想像力の現象学的心理学 —』 (『サルトル全集 第十二巻』所収), 平井啓之訳, 人文書院, 1955年) である。
- 20) 学位請求論文の引用文中に挿入した } } 内には論文末尾の方に記されている増田による「GLOSSARY [用語解]」, または, 「GLOSSARY」に採り上げられていない場合に論文中の当該用語初出等の頁での増田の用語解に当たる言葉を記した。したがって, 頁を記す場合は, 増田による「GLOSSARY」に採り上げられていない場合を指す。以下同様。
- 21) 学位請求論文「再治」公刊本の引用文中に挿入した } } 内には「再治」公刊本末尾の方に記されている増田による「GLOSSARY」を記した。以下同様。
- 22) Cassirer, Ernst, *An Essay on Man*, 1944 (エルンスト・カッシーラー, 『人間 — この象徴を操るもの』, 宮城音弥訳, 岩波書店, 1953年)。